



東京・春・音楽祭 2026 SPRING FESTIVAL IN TOKYO

ドビュッシー：牧神の午後への前奏曲

「牧神の午後への前奏曲」は 1894 年、国民音楽協会の演奏会で初演された。ドビュッシーが象徴派の詩人マラルメの同名詩からインスピレーションを得て作曲した管弦楽曲で、彼の実質的な出世作であると同時に、音楽による空間表現への扉を開き、20 世紀音楽を予見した記念碑的作品となった。ニンフを目にした半獣神が気だるいまどろみのなか、陶然と欲望に耽る白昼夢がモーダルな手法によって描かれる。

サン＝サーンス：ロマンス 変ニ長調

1871 年に書かれたフルート（もしくはヴァイオリン）と管弦楽のための作品。魅惑的な旋律が心に染みる曲で、特にフルートによる演奏では、主題の持つ微妙な色彩が強調され、抒情的な美しさが際立つ。

フランク：ヴァイオリン・ソナタ イ長調（フルート版）

1886 年に作曲されたフランク唯一の「ヴァイオリン・ソナタ」は、豊かな和声、循環形式、そして感動的なメロディを持つ傑作。全 4 楽章で構成され、フランクが得意とした（全ての楽章に共通の主題が現れる）循環形式を用いることで、作品全体に統一感が付与されている。

「第 1 楽章 *Allegretto ben moderato*」の冒頭で、落ち着いたピアノの分散和音に乗って、主要動機が深々と奏でられる。内省的な対話が続くこの楽章では循環主題が提示され、ソナタ全体の基調が築かれると同時に、嵐の前の静けさのように、その後のドラマを予感させる。「第 2 楽章 *Allegro*」は、一転して激しく、劇的な様相を呈す。技巧的なパッセージが交錯し、緊迫感のある音楽が展開する。「第 3 楽章 *Recitativo-Fantasia. Ben moderato*」は、自由な形式を持つレチタティーヴォとファンタジアからなる緩徐楽章。輝かしく希望に満ちた「第 4 楽章 *Allegretto poco mosso*」は、二つの楽器のカノンで始まり、幸福感に満ちた主題が交互に繰り返される。最後は循環主題が堂々と回帰し、圧倒的なフィナーレを形づくる。

フォーレ：夢のあとに

フォーレが 1877 年頃に作曲した「夢のあとに」は、歌曲集《3 つの歌》作品 7 の第 1 曲。イタリアの詩人による歌詞をロマン・リュシーヌが仏訳したテキストにもとづいており、夢の中での愛する人との再会と目覚めた後の切ない喪失感を描いている。もともとは歌曲だが、器楽独奏曲としても人気が高く、様々な楽器で愛奏されている。

ボルヌ：カルメン幻想曲

「カルメン幻想曲」は、フランソワ・ボルヌがビゼーの歌劇《カルメン》の主題をもとに作曲したフルートのための作品。「ハバネラ」や「闘牛士の歌」など劇中の名旋律が変奏曲風に綴られていく。ダブルタンギング、跳躍、急速な音階などフルーティストの限界に挑む超絶技巧が散りばめられており、聴きどころ満載の 1 曲となっている。